

デジタルワークフローにおける誤差と要因

株式会社 S.T.F

代表取締役

藤松 剛

近年、デジタルツールの進化が急激に進み、我々歯科技工士の日常臨床が大きく変化している。その中で様々な情報が飛び交い、各クリニック、各技工所においてどのような設備を導入しどのように活用すべきかが明確になっていないと感じる。デジタルはツールとして正しく扱えば技工作業が劇的に変わり、技工士が本来時間をかけて作業すべき工程に時間をかけられるという最高の利点がある。また、従来の技工では初心者と熟練者との大きな差があったが、デジタルを使えば工程によっては経験値や技術の差が出にくく画一的に製作することができるのではないかと考える。従来の技工作業でも精度を追求するため、各工程において注意点やコツを掴む事で様々な問題を解決してきたと思うが、デジタルでも全く同じである。デジタルワークフローにおいても様々な誤差と要因があり、導入してすぐにも上手くいくわけではない。失敗には必ず理由が存在し、その失敗はメーカー頼みではなく実際に臨床で使用する臨床家が検証や工夫をする事で改善するしかない。失敗したら機械の精度を疑う前に、基本的には原因を突き詰めることで、今後起こり得るエラーを減らしていくことができるのではないかと考える。私自身は現状ではフルデジタルは症例により可能で、基本的には従来の技工とデジタル技工の融合がベストと考えている。デジタルはあくまでツールとして考え、補綴のゴール自体は従来の技工と何も変わらず完成までのプロセスが変化するだけにすぎない。

しかし、デジタル機器も全てにおいて万能ではなく、正しく使用し各機器のポテンシャルを最大限に引き出す必要がある。各機器においての知識をつけないと最大限に発揮することは難しいと考えている。デジタルワークフローにおいて、失敗を少なくするシステム構築の第一歩として、各機器の特色を熟知し、各施設にあった機器導入が必要となる。デジタル機器導入の際に、何を基準に選定していくかというポイントと、各工程に必要なとされる機器についてお伝えしたい。そういったポイントを押さえることで、極力無駄な失敗を少なくする事ができ、デジタルの利点の一つである時間を生むという結果が得られる。

そこで、実際の技工作業におけるデジタルワークフローをベースとして、考えられる誤差とその要因について解説し、デジタル技工の現状とこれからの展望についてお伝えしたい。

略歴

1998 年 新大阪歯科技工士専門学校 専攻科 卒業

1998 年 有限会社 CDL 入社

2003 年 STF Dental Service 開業

2012 年 株式会社 S.T.F Kyoto 設立

2020 年 株式会社 S.T.F Tokyo 設立

2022 年 株式会社 S.T.F Digital Transformation Center 設立

straumann 社 CARES インストラクター

CM 社 Pekkton インストラクター

3shape 社 LAB Ambassador

3shape 社 Global KOL

新大阪歯科技工士専門学校専攻科 非常勤講師